

野に仏・里に仏

大谷 眞

第三回目の旅・その一
般若心経をよみ始める

1994年6月22日 晴

朝4時起床。7時20分発の小松島港行きフェリーに乗る。前回と同じコースだ。4月の二度目の区切り打ちから、既に二月近くが経過したことになる。

前回、雨の中でビバークし、夜半から激しく降る中を歩き続け、徹底的に痛めつけられた足も今ではようやく回復した。まめもふさがり、関節と筋の痛みもほとんど取れた。しかし、あれだけ散々な目にあいながら、今、再び四国の地を踏むことに軽い興奮を覚えている。

今回は歩くお遍路にとって心強い地図を入手していた。前回、Mさんから歩き遍路のためのガイドブックがあることを知らされ、帰宅後、早速問い

合わせ、これを取り寄せたのだ。「へんろみち保存協力会」発行で宮崎建樹氏著「四国遍路ひとり歩き同行二人」(二冊組)である。道中で数多く見かけた標識もこの会によって設置されたものだ。

このガイドブックは、二万五千分の一の地図をベースに、霊場の位置、宿泊設備、食堂等、お遍路さんにとっては欠かせない情報から、公共設備、休憩所、公衆トイレ、仮眠可能な場所及びその具体的な設備内容に至るまで、事細かく地図上に記載されていた。そうだ、これこそ私が探し求めていた歩き遍路のためのガイドブックだ、と小躍りしたくなった。巻末には宿泊可能な民宿、旅館などの連絡先もあり、各霊場との距離も詳しく記載されていた。もう一冊には、遍路

に出る以前の心がまえ、装備、参拜の方法、そして四国全土における各霊場の説明が細かく記されている。このガイドブックさえあれば、ほぼ完璧と思えた。

この本に沿って、もう一度装備の点検をした。全部で7キロ程が快適に遍路を続けられる限度、とある。これにより、テントは今回の装備から外した。万が一、行き暮れても、この季節なら寝袋さえあればなんとかなるだろう。ところが、その他削れるものは削っても、やはり荷物は12キロ程になった。これではまた前回と変わらない。しかし、職業柄カメラは手放せない。フィルムも加えれば、それだけで2キロ近くにもなる。あと簡単な自炊道具も切り捨てがたい。一杯の温かい飲み物が、過酷な状況の中でどれだけ勇気を与えてくれただろう。要は私のしがらみの重さか、と割り切り、この件は再度あきらめることにした。

靴もまた悩みの種だった。確かに軽登山靴は、アスファルトの道には無謀

かもしれない。前回、二十
三番薬王寺から延々と続
いた(単調極まりない!)
国道は、その思いを痛感
させた。ただ、今では足に
もなじんできているし、
ゴアテックスの効能も捨
て難い。ましてや今回は、
梅雨時期のお遍路となる。
迷った末、結局中敷きを
クッション性の高いもの
に換え、そのまま使うこ
とにした。これに加え、ま
め防止対策として、ガイ
ドブックの勧めどおり、
テーピングテープでしっ
かりと保護をした。今度
こそ、余裕を持って歩き
たい。

フェリー乗り場からJ
R南小松島駅まで歩き、
電車待ちの時間に散髪を
済ませる。私の持つ金剛
杖から、他の客も雑えて
お遍路の話題となった。
ここの女将さんも既に2
度もまわられたとのこと。
バリカンで仕上げた坊主
頭にさらりとした風を受
け、皆さんに励まされて
店を出た。

特急料金を節約したお
かげで、JR終点の駅、甲
浦駅まで2時間以上もか
かり、おまけに乗り継ぐ

バスはさらに2時間程待
たされることになった。
気の毒がってお茶を入れ
てくれた売店の婦人もそ
のうち店を閉め、あとは
がらんとした待合室に夫
婦と三人だけとなる。奥
さんの話では、この四国
から大阪に移り住んで既
に三十年、今では二、三年
に一度帰ってくるだけ、
と言う。私のことを何か
の調査の人と思っておら
れたようだ。お遍路と聞
いて、若いのに、としきり
に感心される。ばつが悪
いことこの上ない。

午後3時24分、ようや
く甲浦を出発したバスは、
思い出の道を室戸岬に向
けて走る。前回、甲浦まで
の帰り道は、途中、疲れか
ら寝こんでしまった。今
回はなつかしく車窓を眺
め続けた。Mさんと抜き
つ抜かれつ歩いた道、夏
蜜柑をいただいた露店、
真っ暗な雨の中で野宿し
た海岸はどの辺りだった
だろう……。あの若者と
話をしたトタン小屋のバ
ス停も、少し傾いたまま、
まだそこにあった。

前回、お遍路の身支度
を解いたバス停で、久し
ぶりの衣装に身を包んだ。

第二十四番最御岬寺はこ
こから6キロ足らずだ。
一步を踏み出すと、前回
の苦痛がうそのようだ。
あれだけ悲痛な思いで歩
いたこの道を、今、一步一
歩、胸ときめかせながら
踏みしめている。

道すがらの家々は、防
風林が背の高いコンク
リートの塀に守られてい
る。山の頂には巨大なブ
ロペラがうなりをあげて
いた。やがて驚くほどの
大きさの白いお大師さん
の像が見え始め、さらに
行くと、大師の修業され
たと言われる洞窟「御蔵
洞」の前に出た。時間が遅
いせいか、人影はまった
く無い。

恐る恐る洞窟に入ると、
何やらぞくりとするもの
がある。途中、鳥居があ
り、その奥に石でつくら
れた祠が見えた。奥の天
井は暗くてわからないが、
どのくらいの高さがある
だろう。鳥居から奥に進
むのに、なぜかここだけ
空気が固体化したような
抵抗を感じた。意を決し
てえいっと鳥居をくぐる。
ぼたぼたと天井から落ち
てくる水滴を受けながら、
しずかに手を合わせた。



ここで彼は天からふってきた金星を飲み込み、悟りを得た、と聞いている。出来ればその万分の一でもあやかりたいものだ。振り向けば確かに、洞窟の入り口で、丸く空と海が切り取られている。「空海」と言う名はこれに由来するとのことだが、私

のような凡人にとっては、やはり「お大師さん」の方が親しみを感じてしまふ。ここからしばらく歩くと最御岬寺への標識を見つけた。山道を登り始めると、下草が茂り、かなり

荒れている様子だ。時刻は5時半を回り、あたりは既に暗い。20分ほど登ると山門に出た。人影のない境内で、ゆっくりとお参りを済ませた。あとは焦ることもない、今夜は当寺に付随するユース・ホステルに予約を取っていた。

ところで、今回からは、お参りの手順に「般若心経」を加えることにしていた。たとえ形だけのお遍路でも、やはりお経だけはきちんとあげたい、

そんな気持ちから、前回帰宅後、「般若心経」に関する解説書を何冊か読んだ。意味が分かれば、よどみなく読めるかもしれない、そう考えたからだ。ところが、読めば読むほど、すごい、と思った。これはもう立派な「哲学書」なのだ。

過去、お経とは訳の分からない呪文のようなものの、ただありがたがるだけの、意味不明な抹香臭い形式的なもの、そんな認識があった。子供の頃、一応カソリックの洗礼を

受け、後に反発からこの世界を飛びだした身とすれば、うさんくさい現世的なこけおどし、とも感じていた。ところが解説書を読み進むうち、目から鱗が落ちる思いがした。

自分という身を通して見る世界が、即ち「現実」とは限らない。心のゆれ一つで、同じものでも異なって見えてしまう。他人から見た世界とも異なって当然。だとしたら、絶対的な「現実」などあるのだろうか。結局すべては、人の煩惱が生み出した幻影に過ぎないのではないか。いつも自分の心にあつた漠然としたしこりが、今、少しづつ解きほぐされていくのを感じた。

確かに「現実」は幻ではない。だがやはり、今、私の前に「存在」する事にはかわりはない。幻の「現実」を生きるしかないと悟った時、その幻に苦しめられていた自分を、もっとさめた目で見つめることができる。すべては自分自身の心が生み出したこと。そうか、やっと少し見えてきた、そう思った。そんな思いを込

めて、自分流に「般若心経」を唱えた。

ユースは私一人だった。6、7、8月はお遍路さんにとってはシーズオフ、と対応してくれた奥さんが教えてくれた。8月なら家族づれや学生も訪れるが、6月など団体もなく開店休業らしい。他の宿坊なら恐らく断られていただろうが、そこはさすがにユース（宿坊もある）、一人でも泊めてくれたのだろう。

夕食後、談話室におかれたさまざまな色紙やコメントに目を通し、後は10帖もある、がらんとした部屋に一人帰った。日記を書き上げ、8時には床に入った。

6月23日 雨時々曇り

一晩中雨が強くふつた。夜中に2度ほど目が覚める。7時を回り、出発の頃には雨も小降りになった。玄関で雨具のズボンをはいていると、奥さんが見送りに出てこられた。ポロンチョを着るのを後ろから手伝っていた。お気を付けて、と送りだされ、門先でもう一度礼を述べた。あとはまだ

誰もいない霧雨の中、何枚かの写真を撮った。

開いたばかりの納経所で記帳していただいた後、境内をあとにしようとする時、「吉祥天」と書かれたお堂から、たからかと御詠歌が流れてきた。そう言えば昨夜、奥さんに夕食の準備をしていた後、私はお勤めがありました。あのおとも、御詠歌が聞こえていた。こうして彼女は日々を仏に仕え、美しく老いていかれるのだ、と思った。あるいは既に、もう心は現世を離れておられるのかも知れない・・・。

ガイドブックによると、第一番靈山寺から二十三番薬王寺までが「発心の道場」と呼ばれるのに対し、ここ二十四番最御岬寺からは、いよいよ「修行の道場」となる。三十九番延光寺までの四百十二キロの間は、他より札所と札所の間が開いていて、苦しい行程となることからそのように呼ばれるのだと言う。とにかく、本日から第二ラウンド、



ということか。ちなみに、四十番観自在寺から六十五番三角寺までが「菩提の道場」、六十六番雲辺寺から八十八番大窪寺までは「涅槃の道場」と呼ばれるそうだ。

第二十五番津照寺へはここから7キロ足らず、だからだと車道を下るうちに雨も上がった。下りきって国道55号線に並行する生活道路を歩く。この後、国道に出たり、わき道にそれたりの繰り返りとなった。

室津の町に入り、船溜まりの港を左に見て、少

し行くと津照寺の門前に出た。漁村にある小さなお寺、といった風情だ。大師堂の横からいきなり急な階段で本堂に登る。途中、中国風の鐘楼があり、横手から登って鐘を突いた。降りしなに壁にとめられた一枚の写真が目に入った。一人の男と身障者らしき少女が花畑で笑っている。写真には、少女のものらしい名前と戒名が記されていることから、おそらく冥福を祈ったの奉納と推測できた。父親であろう彼にとって、どれだけ高名な写真

家による作品でも、この一枚の価値にははるかに及ばないだろう。この写真の中でなら、永遠に二人は微笑み続けていられるのだから。

ここからまた1時間ほど歩き、最後は山道を登りきると第二十六番金剛頂寺に到着。建物はコンクリート製で少々味気ない。お参りを済ませてから、この季節では珍しいお遍路さんの団体を横目で見ながら、標識にそって山道に分け入った。踏み込んですぐに後悔した。

しばらく人の通った気配がない。石畳の上には落ち葉が積もり、雨を含んでずりりと滑る。草が生い茂って足元も見えないところも随所であり、マムシに怯えながら坂を下った。途中何度モクモの巢に顔を突っ込む。クモには申し訳ないが、この感触はどうもいただけない。

30分ほどでまた国道に出た。後はまた、海沿いの道を延々と歩く。1時間ほど歩いては少し休み、その度にぽーっと海を見る。こんなひとときがたまらなく楽しい。そのうちまた本格的に雨が降り出し始めた。途中、海を見下ろす小さなお堂を見つけ、慌ててそのひさしに駆け込んだ。ここではしばらく雨宿りをしながら、

沖に浮かぶ岩山が、どんぶり、どんぶり、波に洗われているのを飽きずに眺めた。

雨が止んだところで出発し、途中予約した奈半利町の「梅田屋旅館」に投宿する。電話した時間が遅かったことから今日は素泊まりとした。

ふるに入った後、小雨

の中を洗濯物をもって、近くのコインランドリーに走る。洗濯の間に、前の食品店で買い出しを済ませ、薬屋では消炎スプレーも手に入れた。今回はこれを小まめに吹きつけ、足のオーバーヒートを防いでいる。この方法はなかなか具合がよい。

部屋にかえて日記を書く。明日は6時には宿を出るつもりだ。足の調子はまあまあ。関節が少し痛むが、今のところまめの心配は無さそうだ。9時に就寝。

6月24日 晴れ

4時半起床。昨夜買い置きしたもので、簡単に朝食を済ませた。5時過ぎには荷物をまとめて出発する。昨夜の雨は上がり、青空が広がっていた。

6時半頃、第二十七番神峰寺の麓にたどり着いた。道は上り坂となり、農道のような道をぐんぐん登る。神峰寺への道は、「おったて」と言われるほどの難所と聞いていたわりには、さほどとは思えない。あの室戸岬までの単調なアスファルトの道に比べれば、どんなきつ

い山道でも、私にはありがたい。土の感触と木々に包まれて歩く楽しさは、多少のつらさなど吹き飛ばしてくれる。

7時45分、神峰寺へ着く。山寺らしく霧が降りていた。納経所横手に「神峰水」とあり、どうどうと水が流れ落ちていた。さっそく喉をうるおす。

ところでお遍路を始めから、水のうまさを感じるようになった。一日歩けば、かなりの水分を補給せねばならない。自販機のジュース類は冷えて口当たりは良いが、甘すぎて続けて欲しいとは思わない。その点、麦茶やウーロン茶はさっぱりとしてありがたいが、行動中、一度に飲むには体の負担がかかり過ぎる。いきおい、少し立ち止まって一口飲むには、水筒の水が一番だと感じるようになった。そんなわけで、山道など歩いている時に水場に出会うと、まるで懸賞にでも当たった心持ちで、嬉々として水を汲ませてもらってた。

お参りの後、納経所を出てから、駐車場の前ま



で下る。閉まったままの売店の前に床几台を見つけて、ここを借りて2回目の朝食を取った。今日の宿のことを考えていると、軽トラで男と老婦人がやって来た。荷物を売店に運び込み始めたので、「すみません、軒をお借りしてました。」

と、あわてて片付けようとする、「かまいませんから、ゆっくりしててください。」と婦人。男は、彼女送って来たのだろう、荷物を運び上げると、また車で下っていった。婦人はい

ましがたやって来た参拝者の車にチケットを切つてから、店の中を片づけ始めた。荷物をまとめ、お礼を言っ出て発しようとする、「お遍路さん、山桃って知ってます?」

と、赤い実をトレイ乗せて手渡してくれた。ぱらぱらと塩もかけてある。遠慮なくいただと、甘酸っぱい野性的な味が一杯に広がった。遠い記憶の中の何かの味に似ているが、どうしても思い出せない。

「時々あなたみたいに歩い

てる人、見ますよ。やはり若い方が多いですけど。」

荷物の整理をしながら婦人は言う。毎日ここで働いていれば、いろんな人生を背負った人がやってくるのだろう。歩き遍路に対する心遣いは、彼女にとつてはお大師さんへの手向け、私を通してお大師さんが見えるなら、確かに私はお大師さんに見守られている訳だ……。婦人に再度礼を述べ、神峰寺を後にした。延々と坂を下る。国道に出るから、また海を見ながら歩いた。今日の予定は、明

日の宿泊を考え、短めの距離を予定していた。ガイドブックによると、第二十八番大日寺を少し行った所に「遍路無料接待所」とあり、宿泊も可能、と記載されていた。一体どのような人がどのような意図で提供されているのか、興味があった。ここを利用させていただくとすれば、今日の歩行距離を

ほどほどにしておく必要がある。ただし、あまり早い時間に宿には入れない。このため道草ばかりしながら歩いた。

途中、海岸に降りて足を休める。日なたに靴

下、白衣を並べ汗を飛ばし、岩陰に腰を下ろした。小一時間ほど波を見ながら過ごし、日陰が無くなり始めたのでやむなく出発する。しばらく歩いて、今度は入り江に浮かぶように造られた公園に、新しい東屋風の休憩所を見つけ、再び座り込んだ。海からの風が抜けてすこぶる心地よい。まさに至

福のひとつときに思える。

今回は今のところ、足の調子は悪くはない。小まめに足を冷やす事と、テーピングテープでがっちりと保護していることが功を奏しているのだろう。ただ、今まで足の裏にできていた豆が、今度は指の甲や先端にでき始めた。膝関節の保護のために入れた中敷きと、厚み

思議なことに、その日の歩行距離が多くても少なくて、一日の歩く距離にあわせ、歩けなくなるから不思議だ。今日もあと6キロと言うのに足が前になくなった。へとへとになって今日の宿「ビジネスホテル弁長」に転げ込む。



部屋に入って、早速パ

ンツ一枚になり、上下全部を洗濯した。クーラーをかけ、ハンガーを利用して干し上げる。あとは夕刻まで昼寝をした。目覚め

のある靴下を履いた事で、靴のサイズが相対的に小さくなったせいかもしれない。いずれにせよ、早めの手入れと、いつかのMさんが教えてくれた軟膏のお陰で、今回はひどくならずすんでいる。しかし、足の疲れと痛みは、

やはり常識を越えた無理がかかっている分、なくなりはしない。しかも不

てから、目の前のスパーで買い出しを済ませ、部屋で簡単に食事をした。夕食後はひたすら眠った。今は眠ることが一番のこちそうに思えた。